「東洋の知恵」の魅力——中国学術界に広がる池田研究

韋　立新

※本稿は、２０１５年８月６日、東京・新宿区内（ＴＫＰ市ヶ谷カンファレンスセンター）で行われた特別公開講演会の内容をまとめたものです。なお講演は日本語で行われました。〔　〕は編集部による注です。

ご紹介にあずかりました韋立新と申します。中国の広東外語外貿大学から参りました。よろしくお願いいたします。

私はもともと日本語の教師でありまして、大学では日本の思想文化に関する研究の分野で、修士（マスター）の指導とドクターの指導をしています。華南——中国の南方地域においては、日本語あるいは日本文化関係の学科で博士課程のある大学は、わが大学だけです。私の指導している分野は、日本の宗教・思想・文化、あるいは中日の文化交流史、中日の仏教文化関係、それから日本文化史と関連のあるいろいろな研究テーマであり、これにマスター課程・ドクター課程の若い学生や研究者とともに取り組んでいます。

きょうは、はるばる遠いところからお越しいただいた方々もおられると聞いており、非常に感動していま

韋立新教授は1962年生まれ。中国と日本の交流史、日本思想史などが専門で、主な著書に『宋元時期中日仏教文化関係』『日本仏教源流』『日本中世文化研究』などがある。広東外語外貿大学「池田思想研究所」に設立当初から中心的に関わり、現在、所長を務める

す。私は昨日、中国・広州から参りました。「東京は暑いでしょう」と言われるのですが、広州の気温は38度でした（笑い）。しかも湿度が非常に高くて90％くらいだったでしょうか。ですから、その蒸し暑さたるや、東京のほうがまだ楽です（笑い）。

きょうは、非常に貴重な場を設けていただきまして、本当に感謝しております。「中国学術界に広がる池田研究」ということにつきまして、私自身の感触もあわせてお話をさせていただき、ご出席の皆さまと交流できればと願っています。

「池田研究ブーム」という活況

御存じのように、２０１２年９月に『中国に広がる「池田大作思想」』（潮出版社）という本が出版されております。きょうも出席されている高橋強先生（創価大学教授）が編さんされました。この本では、近年の中国での池田思想研究の現状と動向をよく把握したうえで、「なぜ、いまの中国では池田思想が求められているのか」「中国の研究者たちは、なぜ池田思想を研究するのか」、

このことを、巻末の豊富な資料とともに紹介しておられます。中国での池田思想研究の実情が客観的に反映されている貴重なデータとか情報が豊富に含まれていますから、何かの機会にご一読いただければ参考になるかと思います。

この本に示されているように、この十数年、中国の各大学では池田思想研究所が設立されたり、池田研究シンポジウムが開催されたりして、研究がとても盛んになりつつあります。たとえば、この本の第一部で紹介されている研究者は、清華大学の馮峰先生、北京師範大学の高益民先生、南開大学の紀亜光先生、遼寧師範大学の崔学森先生、大連工業大学の劉愛君先生、南京師範大学の譚桂林先生、それから私です。

こうした先生たちの属している学科や専門は、まことに多様です。たとえば、北京師範大学の高益民先生は、国際比較教育研究院におられ、教育思想の専門家です。南開大学の紀亜光先生はマルクス主義教育学研究学院の方であり、思想教育の立場からの研究です。南京師範大学の譚桂林先生は、大学の文学院に属しておられ、有名な文学研究者です。文学の立場から池田先生の思想を研究しておられます。その他、さまざまに異なる分野から池田先生の研究をしているのが、中国の池田思想研究の特徴のひとつであるということを、まずご紹介しておきたいと思います。

香港の有名な作家で池田思想研究の専門家でもある孫立川先生は、２００７年、「中国の大学における池田大作研究の熱」をテーマに論考を書いておられます。中国語では研究熱と言いますが、研究ブームということです。中国の学術界において池田思想の研究が盛んになりつつあり、研究ブームという状況になっているのではないかという指摘です。中国の大学で池田思想研究所、あるいは池田思想研究と関連がある研究機構が設立された大学の中には、北京大学とか、清華大学、復旦大学、武漢大学、中山大学など、かなり有名な名門大学もあります〔２０１５年９月現在、36の大学・研究機関に設立されている〕。

また、研究者の代表が集っての池田研究のシンポジウムも例年開催されています。研究する学者について

も、それぞれの分野で長年にわたって綿密に研究を重ねて、論文や著書を発表し、多大な成果を上げてこられた学者がたくさんおられます。私のように、日本語もある程度わかり、池田先生の日本語版の著書を直接読むことができる研究者もいます。日本社会の一部には、「中国の池田思想の研究者といっても、何もわかっていない門外漢ばかりの、いわゆる烏合の衆なのではないか」などの声もあるようですが、まったくの事実誤認であると、私はここで強調しておきたいと思います。

学者の中では、「そろそろ『池田学』というのを、大学の中で学科のひとつとして、あるいはひとつの専攻コースとして設置することを考えようではないか」と、そういう提案が出てくるほどですから、どれだけ研究が盛んになっているかがおわかりになるでしょう。そうした実情を把握するためには、先ほどご紹介させていただきました高橋先生の著書のほかにも、いろいろな資料やデータがあります。今の時代はパソコンがありますから、容易に入手できるでしょうし、ここではくわしくご紹介する必要はないと思います。

「宗教活動家」が中国でなぜ評価されるのか

もうひとつ、このような研究ブームに関して強調しておきたいことは、これが決して政府の政策上の産物ではないということです。むしろ、皆さま方も御存じのように、中国では宗教活動に対する規制が厳しいわけです。その中国で、なぜこんなことが起こっているのか。その根本的な原因について、自分の感じたことをここで述べさせていただきたいと思います。

周知のとおり、中国は一応、宗教信仰の自由を認めます。しかし、決して宗教団体の宗教活動を奨励したり評価したりすることはありません。そして、池田先生に対する今の中国の公の位置づけというか定義は、SGI（創価学会インタナショナル）のリーダーですから、「宗教活動家」と見るわけです。もちろん、社会活動家、思想家などの面もありますが。ですから、宗教活動家ということになると、中国では本来なら非常に厳しい見方です。高く評価することはないはずなのです。つまり、前述のような現象は、従来の中国の政治環境か

らすると、とても考えられません。言ってみればこれは異様な現象ではないかと思います。ですから、私のよく知っている外国の友人の学者からも、日本人の友人の学者からも、時々言われます。「ああいう体制なのに、何で池田思想研究のブームが起こっているのか」と。その根本的な原因はどこにあるのか。

御存じかと思いますが、中国の伝統的な観念の中に、「飲水思源（いんすいしげん）」と言って、水を飲むときには井戸を掘ってくれた人の恩を思え、つまり井戸を掘った人の苦労と恩を忘れるべきではないという教えがあります。あるいは、そういう気風が伝統的にあります。ですから、中国人からすると、あの1968年という非常に厳しい時代に、命の危険を冒してまで中日の国交正常化を呼びかけた池田先生のことは実に忘れがたいのであり、ある意味では「井戸を掘ってくれた人」であります。これは間違いありません。あの有名な「九八提言」〔1968年9月8日の「国交正常化提言」〕の発表が、確かに中国人の中で非常に反響があって、好感を博しました。そのために自然な感情として、中国人が先生を尊敬するようになるのも当然でしょう。

でも、本当にそれだけの理由によるものでしょうか。つまり、ただそのひとつのことで、周恩来総理をはじめ中国の歴代の責任者たちが池田先生のことを「中国人の善き友」として温かく迎え、必ず喜んで会見したりするようになったのでしょうか。

それだけではないと私は思います。たとえば、いつも理性的に冷静に考え、処理しがちな文化人、あるいは学者たちまでが池田先生のことをあれだけ尊敬し、あれだけ敬服しています。たったひとつの提言だけで、そのようになったというのは、どう考えても無理なところがあるのではないかと思います。やはり、その根底には、もっと深いもの、もっと深遠なる理由があるのではないかと考えます。

先ほど触れた『中国に広がる「池田大作思想」』という本からも多少はうかがわれるのではないかと思いますが、私自身も、これに関して自分なりに考察して、四、五年前に論文を書きました。池田先生の思想の原点について探求して、論文にしたわけです。簡潔に言えば、

主に次のようにまとめられるでしょう。

1点目として、日蓮大聖人の仏法を根本に平和と文化、教育運動を世界的に展開してきた実践活動に皆、注目しているからではないか。

2点目に、法華経の知恵に基づいて、現代社会や現代人が直面する様々な問題群への解決を求めようとする池田先生の提言とか創価学会の取り組みに、大いに賛同しているからではないか。

第3に、池田先生が提唱する人間主義や、生命の尊厳を尊ぶ創価の理念に、大いに共感を覚えているからではないか。

一応、こういうふうに要約させていただきました。ここでは、これ以上展開いたしませんが、私個人の体験を語れば、もっとおわかりになるかと思います。

その風貌にじかに接して

私は日本仏教思想史の研究から出発しまして、十数年前から池田思想研究を始めたわけです。

私の場合は、まさに池田先生の有する「東洋の知恵」というものに圧倒され、魅了された――あるいは〝折伏〟された（笑い）という言い方を使ったほうがもっと妥当ではないかと思いますが。そのような気持ちで池田思想の研究をやり始めた多くの研究者の中のひとりであります。

そのきっかけは何かと言うと、２０００年2月に、私の勤めている広東外語外貿大学が池田先生を第1号の名誉教授としてお迎えできたということです。そのとき、香港の創価学会で、名誉教授称号と証書を池田先生に授与する式典を行いました。幸いなことに私も当時の学長たちと一緒に出席しました。その席で、はじめて池田先生にお目にかかることができたわけです。そして、ありがたいことに、学長の黄建華先生と池田先生との懇談の席にも同席させていただきました。黄建華先生はフランス文学、フランス思想の専門家であり翻訳もされていますが、池田先生は黄先生と、フランス文学や、文学の翻訳について非常に堂々と語り合っておられました。そばで聞きながら、池田先生の博識、英知に優れた風貌、人を包み込むような人格、そ

して味わいのあるお話しぶりを目の当たりにし、私は非常に圧倒されました。そのときのことを思い出すと、いまでも本当に感慨無量です。

もちろん、私の場合は、その前から日本仏教史の研究に携わっておりまして、仏教史についても学生たちに教えたりして、ある程度はそれらの勉強もしていたわけです。鎌倉仏教だとか、日蓮大聖人のこと、その仏法の実践団体である創価学会のことも学んでおり、もちろん池田先生のお名前と、有名な「九八提言」のことなども、ある程度は知っておりました。しかし、実際にお会いした経験から、私にとっては実感がわいて、この博識で威厳のある知者は一体どんな人物なのか、もっと知りたくなりました。その深遠なる思想の根底には一体何があるのか、そういうことも、もっと知りたく、もっと探りたくなったというのが率直な思いでした。

創価学会は一体どんな性質の組織で、池田先生の指導のもとでどのような実践活動をしてこられたのか。仏教の重要な「法華経」を宝典とする日蓮仏法とはどんなものか、その理念と精神は生きた哲学としてどのように現代社会に生かされているのか。SGIも確か192ヵ国に広がり、世界の各地域でいろいろな実践活動をしておられます。平和的で幸福な世界の建設に、日蓮仏法がどのように生かされているのか——そういうことを探究しようとして、正式に研究を始めたわけです。そして、研究しているうちに、池田思想がもっている現実的な意味、そしてSGIの実践活動にますます共感を覚えるようになり、感銘したのです。

被災者の中に「人間革命」の姿を見た

もうひとつ、非常に忘れがたい経験があります。2012年5月、私は、創価大学での「教育フォーラム」に数人の中国の研究者と一緒に参加する機会に恵まれました。その来日の際に、東日本大震災後の石巻を訪問し、地元の創価学会の皆さんと直接の交流ができました。

これは、忘れられない経験でした。大地震と津波による被災、そして震災後の生活での大変な闘いの中で、

創価学会の会員の皆さんが、自分のことは後回しにして、心身ともに絶望に陥った周りの人々の激励と救助に身を投じておられました。池田先生の教えた信念によって、一人でも多くの人に、生きていく希望と勇気を与えていこうと尽力しておられたのです。感動的なお話をたくさん、直接に当事者からうかがい、私にとって非常にありがたい経験でありました。なかには、見たところ、ごく普通の主婦、あるいは市井の人であるのに、池田先生の教えた信念によって、これほど偉大なことができるのか――と心から感動させられるケースもありました。この経験によって、信念というものの力強さを私は改めてしみじみ感じることができたのです。

池田先生が提唱する「人間革命」の精神、創価学会の理念というものが、現実の姿として、胸に迫ってまいりました。特に、功利だけを重んじる現代社会においては、池田先生が提唱する精神・理念がどれほど貴重なものであるか、大事なものであるか、しみじみ感じました。先ほど申し上げたように、自然のうちに、心から〝折伏〟されたのです（笑い）。

他の研究者も、私と同じように、池田先生の思想と、先生の指導するSGIが世界の平和と人類の幸福に寄与するために行っている様々な実践活動に注目して、研究を始めたのだと思います。創価の人間主義や生命の尊厳――人間の生命だけではなくて、あらゆる生命の尊厳を尊ぶ理念に共感を覚え、賛同しています。さらに、もっと多くの人に池田思想の貴重さを知ってもらいたいと願い、実際にそう努めている学者も、たくさんいることでしょう。

ついでに、ここでご報告しておきたいのですが、今年の5月に、広東外語外貿大学で開催した池田思想シンポジウムも成功しました〔テーマは「幸福を創造する力」〕。光栄なことに池田先生からのメッセージもいただきました。天津の南開大学からも、マカオからも、台湾からも、研究者・関係者が40人くらい集まってこられ、池田先生の「幸福論」をめぐって、熱烈に討論が交わされました。

「調和社会」「文化強国」建設に必要な哲学

２０１１年11月には、北京で「池田大作思想研究サミット」が「人間主義のルネッサンス――池田研究の成果と展望」のテーマで開催されました。私も参加しました。当時の『聖教新聞』（２０１１年12月10日付）にも掲載されましたが、私は「中国の文化建設の手本とすべき哲学」という題で、次のような見解を述べさせていただきました。

――池田思想は、仏法を基調とした「人間主義」に基づいて、「人間」と「生命の尊厳」を至上の価値としています。「人間革命」を掲げるその眼目は、一人ひとりが本来もつ無限の可能性を自分のためだけではなくて他人のためにも、つまり自他ともの幸福のために最大限に発揮することです、と。また、その意味で、最近中国でよく議論されている「調和社会の構築」「調和世界の建設」を考えるときに、この思想は不可欠のものであるとも申し上げました。

近年の中国の変化として、ひとつの大きな、ある意味では最大の転換と言っても過言ではないと思いますが、「人間を根本にし、調和の社会を構築する」という思想が強調されるようになっています。これは顕著な変化であり、注目すべき動向と見ていいでしょう。かつての中国では、「国家や社会集団の繁栄のためには、個人の幸福の犠牲はある程度、やむを得ない」といった風潮がありました。しかし、今は変わりつつあります。「以人為本（人をもって根本となす）」との「人間の尊重」や「人間性の重視」を重視する方針が掲げられるようになりました。個人を大切にし、民衆を重視し、人間を中心として、共に調和社会を構築しよう――こういう思想が提唱され、いろいろな著作とか会議で議論され、会議のシンポジウムのテーマとしてもよく掲げられるようになっています。「人民日報」でも、しばしば提唱されています。一般庶民にも非常に親しい理念となっております。今後、中国が発展すべき方向性として、調和社会の構築、文化国家の建設が最大の目標になっているわけです。また、世界も協調と共存を求めているわけです。ですから、池田先生の提唱され

る〝生命の尊厳を守り、一人ひとりの個人の人格と尊厳を尊重する〟という思想は、必ずやさらなる支持と賛同を広げていくに違いありません。

たとえば、2011年の「六中全会」（中国共産党第17期中央委員会第6回全体会議）では、「文化強国の構築」が提起され、文化体制を改革して、経済成長に見合う文化の発信力を強化することが確認されました、党の最大目標としても、国の目標としても、文化力を向上させ、文化産業を今世紀の国の支柱産業として、重点的に発展させるべきだということです。それを考えるときに、池田先生の人間主義思想、創価の理念の独特な価値と重大さは、ますます認識され評価されるようになるのではないかと見ています。まぎれもなく、池田思想は「中国の文化建設の手本」とすべき貴重な哲学であると私は考えております。

法華経の知恵・東洋の知恵の実践者

きょうのテーマに戻りますが、池田先生は毎年、SGIの日〔1月26日〕を記念して、見識に富む提言をしてこられました。私は、いままでの提言を考察して論文にまとめました。そこでも触れましたが、先生は「法華経」の知恵に基づいて、環境とか平和とか、現代社会と現代人が直面する様々な難しい問題群について、それをどう解決すればいいのかを提言されているわけです。法華経の知恵から、参考とかヒントを得て、問題の解決を求めようとしておられることがうかがえます。その意味で、まさしくこれは「東洋の知恵の結晶」ではないかと、私は考えています。これと関連していますが、中国の池田思想の研究者のなかには、池田先生は中国の伝統文化を代表とする東洋的価値観の影響を深く受けてこられたために、情熱的に中日交流に心血を注いでこられたのではないかとの見解があります。深圳大学の元学長・蔡徳麟先生の著書〔『東洋の智慧の光　池田大作研究』鳳書院〕にも、このような見解が示されていました。

つまり、池田先生は「東洋の知恵」の持ち主であるということです。

先生は、何ごとでもこの知恵をもって自ら実行し、

自らの実践活動を通じて周りの人々を感化し、共感を覚えさせ、賛同・支持を得てから仕事に取りかかっておられる。教えるときは、一方的、強制的に説教するのではなくて、あくまでも会談とか対話によって、相手にも周りの人々にも納得してもらう。そういう行動や取組み、これも、まぎれもない東洋の知恵の反映ではないかと思います。こういうことも含めて、中国の学術界は池田先生の東洋の知恵に魅了されているからこそ、いわゆる研究ブームを巻き起こしたのではないでしょうか。

今後の課題と展望

最後にお伝えしておきたいのですが、実は私も含めて池田思想研究に携わっている研究者の中で、ひとつ悩んでいることがあります。どういうことかというと、この池田思想研究、あるいは先ほど言いました「池田学」――まだそういう言葉は正式には使われていませんが――、その専攻コースを設置するのであれば、いったい、どの学科に帰属させたらいいのか（笑い）。いろいろな学科の分野から研究しているわけですので、どうすればいいのか、よく議論されています。

私の場合は日本仏教史、日本仏教思想史の研究をやっていますから、日本の思想・文化研究、あるいは日本の哲学思想として研究する。これは可能です。しかし、人によっては、教育思想、また法学や文学、哲学の立場から研究する方もいます。

研究所の名前も多様です。たとえば、広西師範大学や大連芸術学院は「池田大作教育思想研究所」としています。中山大学「池田大作とアジア教育研究センター」の王麗栄先生は道徳教育の専門家です。こういう教育の角度からの研究となると、どうしても教育の学科に帰属させ、教育学のひとつの専攻としてやろうではないかということになります。しかし、遼寧師範大学は「池田大作平和文化研究所」であり、私の勤めている広東外語外貿大学、また上海師範大学や大連工業大学は「池田大作思想研究所」です。ある社会科学院で、その中の精神文明建設研究所において池田思想の研究をしている場合もあります。東北師範大学や貴

州大学は「池田大作哲学研究所」であり、哲学思想として池田思想を研究しています。ですから、これは哲学のカテゴリーに帰属させるべきではないか、となります。

研究の論文を発表するときも、問題が出てきます。つまり、どの学科の論文集、どの分野の研究論文として発表したらいいのか。ときどき、そういう問題が出てきます。私であれば、自分が指導しているマスターとか、ドクターの学生も一緒にやらせるとなると、私の場合はどうしても文学関係の修士号・博士号を出すことになりますので、外国文学学科に帰属することになりますが、それでいいのかどうか。

中国の教育に関する管理とか指導を行っているのが教育部であり、日本の文科省に当たります。この教育部による大学の専攻一覧に即して分類しようとすると、なかなかひとつの枠に収まらないのが池田研究なのです。このように、いろいろと悩んでいるわけですが、これから多分もっと議論が深まっていくことでしょう。そして、より制度化した研究態勢が整っていくようになると思いますし、そのために今、一生懸命、努力しているところです。

私の勤めている「池田思想研究所」でも、できれば今後、学部生も集め、もっと院生のマスターとかドクターも集めて、池田先生の著書を一緒に勉強したいと考えています。「読書会」というかたちでもいいと思います。現に、南開大学では池田先生と周恩来総理との関係の研究会・学習会をやっており、学部の学生と院生が一緒に読書会をやっています。

また、今後、青少年に向けたわかりやすい池田先生の著書・エッセイなどを学習者あるいは一般の読者にも学びやすいよう、中国語と日本語との「対訳」のかたちで出版したい。もっと一般読者にも知ってもらうようにわかりやすく書いた本を出版したい。他大学とも協力して、そういうプロジェクトの設立を考えております。

こうした努力によって、また、できれば皆さま方のお力もお借りして努めていけば、これからもっともっと池田思想の研究が好ましい状況になっていくのでは

ないか、そう考えております。さらに、池田先生の『法華経の智慧』とか蔡徳麟先生の『東洋の智慧の光』も参考にいたしまして、池田思想に対する考察を今後も、ぜひ発表させていただきたいと決意しております。そういう私の思いもありますので、ぜひ、今後とも交流し、力を合わせて努力してまいりたいと念願しております。ご清聴ありがとうございました。

（い　りっしん／広東外語外貿大学教授、同大学池田思想研究所所長、中華日本哲学会副会長、中国日本史学会古代史専門委員会会長）